

民医連厚生事業協

共済だより

2022年
2月
第166号

発行所●全日本民医連厚生事業協同組合

〒113-0034 東京都文京区湯島2-4-4
平和と労働センター6F
TEL03-5842-5650 FAX03-5842-5652
E-メール:k-tayori@min-iren.gr.jp
(共済だより用)
kyousai@min-iren.gr.jp
(厚生事業協宛)
ホームページ:https://min-jigyo.or.jp



いわさきちひろ「セーターを着る子どもたち」1960年（14ページに作品のコメントと美術館のご案内をしています）

主な記事

- 各地の共済企画 石川民医連職員共済会
- 伝えていきたい私の民医連¹³⁸ 元神奈川民医連会長 川崎 博通(中)
- アピール 平和を守ろう Web原水爆禁止世界大会のとりにくみ・熊本
- いま、なぜ憲法改悪なのか パートII⁹⁷ 若手弁護士の会
- 縮図からみる世界⁴⁵ 時代の変化が激しすぎる／斎藤 貴男
- 私の趣味・こだわり紹介¹⁴ ストレス発散！楽しい作品作り!!／神奈川・まさ ペンネーム
- 私の趣味・こだわり紹介¹⁵ そうだ、石仏を撮ろう。／群馬・めがねさん ペンネーム

2021年度
スポーツ文化企画
のお知らせ

<https://www.min-jigyo.or.jp>



ログイン 2021
パスワード 1192
(半角数字)

携帯電話でご応募の方は
こちらからどうぞ
応募先のメールアドレスが
読みとれます



1. 通常国会で与野党の叡智を 結集

年が明け、通常国会が召集されました。いうまでもなく新型コロナウイルスのオミクロン株が猛威を振るう今、それへの迅速な対応と、憔悴しきった市民生活と経済を立て直すことが最優先課題です。

「政府(官邸)主導」というと一瞬間こえがよく機動性に富んでいるようなイメージを抱くかもしれませんが、その内実は、首相とその側近の場当たり的で非科学的な思いつきが乱発され、専門家の意見に謙虚に耳を傾けることもない、目先の経済最優先(つまりこの国に生きる人々の命は常に後回し)な政治が続く2年間でした。思慮浅い権力には常に専門家と野党による諫言とブレイキが必要で、与野党が国会で知恵を出し合うことがなによりも必要です。

2. 「野党は批判ばかり」?

しかし昨年秋の総選挙後から、「野党は批判ばかりするな」という「批判」が多方面から聞こえます。先日、某ユーチューバーが立憲民主党に向けて「自民党や官僚を敵視せず、協力体制

シリーズ

いま、なぜ憲法改悪なのか パートII

⑨7 「野党は批判ばかり」って? ～ 毅然と斬りこむ責務を捨てれば「翼賛」～



「明日の自由を守る若手弁護士の会」共同代表 黒澤いつき
公式ブログ <https://www.asuno-jiyuu.com/>

をつくるべき」と発信しました。また、自分たちは批判ばかりする野党とは違う、と言わんばかりに野党共闘の枠組みから一線を画したり、野党共闘を敵視したりする政党もあり違和感を禁じ得ません。

憲法を公然と無視して臨時国会を開かないことや、明白に憲法に違反する法を批判するのは余計なことでしょうか? 選挙買収や贈収賄を許さず追及することは余計なことでしょうか? あるべき視点は、「批判ばかりするな」ではなく「批判されるようなことをするな」ではないでしょうか?

この国の議院内閣制の下では、政府の方針、提案はほぼ与党の方針・提案です。その方針や提案に穴や違憲・違法な点はないのか、そもそもその方針は正しいのか、よりよい政策・立法・予算を目指して厳しくチェックする役を担えるのは野党しかいません。疑問をぶつけ、批判し、政府与党に欠陥を気づかせ、議論し、より良いものをするためには、野党が厳しく質問をぶつける批判するしかありません。

首相や閣僚に不正な金などの疑惑が発覚すれば、そもそも政権の中核で民主政治に関わる資格がない可能性があるので、法案審議の前段階としてその

疑惑を追及せざるを得ません。野党の質問や批判は、政治を停滞させたり妨害するどころか、憲法に忠実な民主政治を行う上で必須のもので、そこにこそ野党の存在意義があります。「野党は批判ばかり」という主張は、魚屋さんに魚介類ばかり売ると言っているようなもので、見当違いと言わざるを得ません。野党が批判をやめて「与党に協力」などとうたつてしまえば、それは「翼賛」にほかなりません。

岸田政権は「聞く力」を強調し、安倍・菅政権より穏健なそぶりは見えますが、森友学園(公文書改ざん)問題や「桜を見る会」前夜祭の疑惑など、重大な疑惑について積極的な真相究明をする様子は一切ありません。野党が斬りこまなければ、いわゆるアベ政治は終わらないことは明らかです。

3. 毅然と批判して 民主主義を守ってこそ

議論が苦手で「長いものに巻かれ」がちなの社会では、「批判ばかりするな」という野党への見当違いの主張も耳触りよく聞こえてしまうようです。毅然と批判し、権力と対峙する野党を応援し、支えていくことが、民主主義を再生させる唯一の道です。

縮図からみる世界【45】

齋藤 貴男



時代の変化が激し過ぎる

なんだか最近、仕事場の風景が以前と違うような気がする。具体的には、書棚の本1冊1冊の輝きが、だ。

もともと読書好きだし、職業柄もあって、その時々心惹かれたり、有用と思われる本を手に入手しては、大切にしてきた。なのに、どれもこれも色褪せて見えてしまう自分がある。もう1冊も要らねえや、いつそのこと、全部ブックオフにでも売っちゃおうか、などとも思う。

時代の変化が激し過ぎるせいだ。

10年以上も前から少しずつ膨らんできた感覚。何もかもがデジタルに置き換えられていく過程で、アップ・トゥ・デイトに上書きされるわけもない古本たちなど、二度と手に入る機会はないままなのかもしれない、という。それがここ1、2年、新型コロナウイルスのパンデミックに伴って、一気に加速した。

ウィズコロナにおける新しい生活様式。

ニューノーマル。ITビジネス、ということは今や巨大資本および国家権力の一部あるいは総体でもある存在を抜きにしては語れないテーマは、しかし、必ずしも自然に産まれ、育まれたものだとは限らない。

否、むしろきわめて人為的、もっと言えば政治的に導かれたウェイトが高いものだったと思われる。誰に？ デジタル万能の社会が構築さ

れることで、莫大な経済的・精神的利益を謳歌おうえんできることとなる支配層に――。

とすれば私たちは、よほど考えなければならぬ。近未来のデジタル超・監視社会にあつて、それでも自由な魂を湛たえた人間であり続けるためには、これまでよりもはるかに多くを学び、己の糧かとする必要がある。

そんなことを思い、改めて書棚をためつ、すがめつ。と、あるわ、あるわ。色褪せただなんてとんでもない。ピンときた本をランダムに取り出してみた。

朝日新聞経済部編『くたばれGNP 高度経済成長の内幕』(朝日新聞社、1971年)。小堺昭三『密告 昭和俳句弾圧事件』(ダイヤモンド社、1979年)。吉原賢二『私憤から公憤へ 社会問題としてのワクチン禍』(岩波書店、1975年)。エコノミスト編集部編『証言・高度成長期の日本』上下巻(毎日新聞社、1984年)。

出版からかなりの時を経過して、けれども中身は一向に古くなっていない本たちが、山ほど。まだまだ、小説だつて。

ジョージ・オーウェル『動物農場』(角川文庫、1984年第20版)。オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』(講談社文庫、1998年第17刷)……。

齋藤 貴男 (さいとう たかお)

1958年東京生まれ。早稲田大学商学部卒。英国パーミンガム大学大学院修了。主な著書に『機会不平等』『国民のしつけ方』『戦争経済大国』『驕る権力、煽るメディア』『決定版 消費税のカラクリ』『いちばんたいせつなもの』など。

